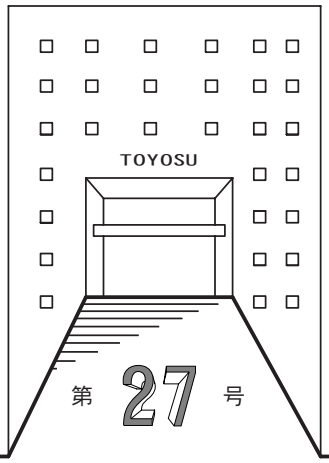
建築学科卒業生たより
芝浦工業大学
建築会

ご寄稿頂いた皆さま

松寿章　上村智彦　毛井正典
古屋浩　小澤雄樹　山口洋平
菊池優希　町田康　南野脩
村田省吾　吉田優一　香月直哉
小林宣文　野島毅　山嵜一也



第27号

芝浦工業大学建築会
〒一三五-八五四八
江東区豊洲三-七-五
〇三(五八五九)八四〇〇
http://sit-arch.com/
二〇一一年一〇月一日　刊行

若い世代のチャレンジに希望がある

建築会副会長
松寿章（一九七八卒）

三月一一日に起きた東日本大震災で被災された皆様ならびにご親族ご友人の方々に心よりお見舞い申しあげます。

今回の大地震と大津波、それに伴う原発の事故は想像を絶する衝撃的なものでした。最近の世界情勢として、アフリカの民主化、中国の台頭など以前には想像もしていなかった現実がおきています。そうした中、原発を巡る日本の報道や政府の対応などが世界の中で問題視され、日本の中枢の崩壊危機とも評される現実を知ることになったのも驚きでした。政治空白をきっかけにした世代交代はあまりにも長かった政治の低迷の後でもあり、前途に期待できる流れができてきたように感じさせてくれます。若い世代のがんばりが失われた二〇年と言われる長い低迷の時期を脱し、今回の大震災が日本再生と変革のきっかけになるとすればせめてもの救いになるのではないでしょうか。

本学工学部建築学科でも大きな変化がおきています。本学卒業の毛井先生と上村先生、並びに環境システム学科の衣袋先生と小坂先生が今年度をもって退職され、来年度末に構造の林先生、再来年度末は枝広先生が退職をされる予定になっています。諸先生方の退職により、本学の雰囲気が大きく変化してきています。そうした中、構造系の岸田先生、計画系の郷田先生や原田先生は九〇年代の本学卒業ですが熱心に学生を指導されています。

紹介が遅くなりましたが私は七八年卒業です。建築会の中で主にやってきたことは七〇年代卒の唯一の常任幹事として、多くの諸先輩と九〇年代以降の後輩との橋渡しです。建築会も全体に劇的に若返り、昨年は鈴木会長の発案で、昨年末第一回建築会同窓会を開催しました。低迷が続く建築業界の中、実務レベルで雇用のあり方に大きな変化が起きてきました。大手設計事務所や不動産会社や商社などで、中途採用者などが全体の三割から四割にまでなってきている会社も多いようです。特に若い世代に対しては人材の流動化が今後ますます進んでいくでしょう。とりわけ若い世代には多様な可能性が開かれている建築・不動産業界になっていくでしょう。同窓会などの催しを通して、在学生や若者たちとすでに活躍している先輩がたとの交流が、新しい雇用機会の創出などにも役立つとしたらうれしい限りです。

最後になりますが在学生を含めた若い世代がこの震災とそれに伴う一連の現実を受け止めて、災害の復興を願うと同時に、日本再生と変革にますます元気にがんばってもらいたいと思います。建築会としても様々な活動を通して諸先輩方のご指導ご鞭撻で次の世代の若者たちを後押ししていきたいと考えています。

【（株）松寿設計コンサルティング一級建築士事務所】

学生との時間を共有することを大切に

上村智彦

建築会の皆様には、ますますご清栄のことと拝察いたします。この度、私は平成二四年三月をもって、四二年間の教員生活を終えます。この間、常に念頭に置いたことは、大学の評価は、社会に貢献できる卒業生をいかに多く輩出できるか否かにより決まることで、本学の存在は、この点にかかっています。本学卒業生の私は、入学時に本学が中堅技術者養成学校であると聞かされたとき、愕然としました。我々のほとんど誰もが、一流になりたいと望んでいます。

卒業後、助手として奉職し、二年程して、本学の非常勤講

師であった東京大学の梅村、青山両先生の計らいで、二年間先生方の元に国内留学させていただきました。留学時に、同じテーマについて研究しても、能力もさることながら、同窓の人を育てる伝統的気風・組織力等の違いで、同じようにしていては本学の社会的存在を打ち出すことは難しいと思いました。自分の立脚点を踏まえて、有名大学に追随するのではなく、独自のスタンスで、本学学生の考え方、人としての強さに刺激を与える教育観をもつ必要性を感じました。

「学生との時間を共有できる」卒業研究、修士課程時の研究では、学生と共に歩む心を持ち、共に進化する姿勢で学生と接し、先見性・創造性を備えた本学ならではの研究テーマを取り上げ、本学の卒業生は、有名大学の卒業生と同じことをするのではなく、「違い」で社会の中で存在感を高めることを伝えてきました。卒業生は、研究、施工、設計等で社会的評価を得ており、大変誇りに思う次第です。

例外を除いては、卒業生でないと本学の立場に立ちきれません。本学と自分が切っても切れない人材が本学の主体性を担うことになると考え、この一〇年近くは、芝浦工業大学が存在し、我々が存在することを意識し、工学部長、常務理事として大学運営に携わってまいりました。

有名大学と本学の違いは、伝統に基づく「社会的評価」と「同窓の人を育てる気風」でありますが、本学もすでに創立八〇周年も過ぎ、一般社会においても、学内においても、本学卒業生が主導的役割を果たすべき時期を迎えており、卒業生諸氏に期待する次第であります。

現在、本学の存続に関して気がかりなことは、今後、少子化傾向にあることと、本学は類似学科を多数抱えていることであります。類似学科の件については、早急に方針を立てる必要があります。

最後に、長きに亘り教員として勤めることができたのは、卒業生、諸先生方のご支援があったればこそで、深く感謝申し上げる次第です。

【芝浦工業大学工学部建築学科　建築耐震工学研究室】

退任にあたって

毛井正典（一九六九卒）

建築会の皆様に於かれましては、各方面でご活躍のことと推察します。又このたびの震災で被害に遭われた方々には、こころよりお見舞い申し上げます。

さて私、今年度を最後に、芝浦工業大学を退職することになります。思い返すと一九六九年、卒業と同時に助手として大学に残り、その後四三年間もの長きにわたり教職につき、その間およそ五〇〇〇名の学生の教育にあたることができたことは、この上ない喜びであります。

当時は、ちょうど学生運動の真っ盛り、大好きな建築の設計活動に思ったようには取り組めず、もどかしく、いっそ大学をやめてしまおうかと悩んだことがたびたびあったことを記憶しております。

しかし、後輩の学生たちからの真摯な問いかけであった『技術者の倫理』、『主体性を強要する教育』等の問いかけを真剣に受け止め、それまでのカリキュラムを大幅に変更する大改革に取り組みました。それは大学の目指す大方針『人間主義の工学』とも合致していたことと、母校への思いが、私を教員に留めさせてくれたと考えています。

当時私は、建築学科の錚々たる教員の中で一番年下であったため、学生たちの設計上での悩みや戸惑いは、手に取るように理解できました。ちょっとしたアドバイスに学生から『目から鱗がとれたようだ』といってもらったときは、うれしく教員冥利に尽きる思いでした。教育では、講義よりは、エスキースの方が楽しみでした。更に建築好きの学生と同じ目線で、一緒に考え、一緒に作業することが何よりの楽しみでした。学生と共同で取り組んだ設計競技、展示会の作品制作、空間構成のゼミナール、海外研修の旅行、大学院生を引率してのモスクワやスイスでの交換授業、等々は積極的に担ってきました。

少年のような気持ちで都市と建築設計に向き合い、常に好奇心を持ち続けてきました。気がつけば、学生の父親の世代をゆうに超えており、あっという間の四三年間でした。たいした成果をあげることもできませんでした。真に『少年老い易く、学成り難し』というのが実感です。現実は、中々想いどおりにはゆきません、成果がでないことの方がほとんどです。

問題は建築に向きあう姿勢と、努力するプロセスこそが重要なのだと自分に言い聞かせ納得せざるを得ません。

建築は、人のため、災害から身を守り、優しく包み、人が幸せに感じられる空間を創造すること。人を危険に陥らせ不幸にさせるような技術は、建築に不要です。

日本は経済的には発展しましたが、未だスクラップアンドビルドを繰り返し便利さのみを追求し過ぎているように思います。結果建築も都市も決して豊かであるとはいえません。安心、安全にも落とし穴があることが、今回の震災で露呈しました。いま、建築も都市も、必要以上の便利さよりは、安全性と豊かさ、持続可能で安定した環境が求められています。

このたび、私と構造の上村先生は退職しますが、建築学科出身の専任教員五名と多数の非常勤教員が後を継いでくれています。今後建築学科は、これまでの伝統を引き継ぎつつ、時代に即して柔軟に対応し発展してゆくことと確信しております。

皆様方と、また再びお会いできるのを楽しみにしております。

【芝浦工業大学工学部建築学科　建築空間研究室】

着任のご挨拶

古屋浩

この四月に建築学科に着任させていただきました古屋と申します。何卒よろしくお願い申し上げます。専門は、建築環境・設備工学で、主は建築音響、空間音響、音響心理および音響設計といった分野になります。この場をお借りして皆様方へのご挨拶と自己紹介をさせていただこうかと思います。

生まれは九州の福岡で、九州大学大学院を修了後、某楽器音響メーカの研究所に入所し、一一年の間空間音響に関わる研究開発並びに音響設計実務に携わっておりました。当時、建築の音環境設計に対する社会的認知度は皆無に等しく設計料で飯が食える状況では全くありませんでしたが、一方では、幸か不幸か第二次オイルショックを経て未曾有のバブル景気への突入時期にあたり公共ホールやイベントスペースがそこら中で計画されたお陰で、東京大阪間の現場を日帰りで走り回っておりました。まさに無我夢中、社会が大きく動く中であったからこそ現在の私自身の幹を成せた時期であったように思います。その後、郷里九州にある某私立大学における二〇年間の長い研修期間（？）を終え、このたび晴れて本学から有難いご縁をいただき今日に至っている次第です。

行ったり来たりの道程の中で、しかしながら何かにつけ歳を重ねるごとに想うことは、やはり経験こそが人をつくり成長させてくれるということに尽きるようです。私もご多分にもれず「今時の若い者は…」が口癖の人種ではありますが、今の世の中、どうもアナログなアンテナ（感性）が不足している或いは嫌われているように思えてなりません。昨今地上デジタル放送への移行も進み、技術開発の上から効率的・合理的システムは勿論必要なものでありますが、しかしながら人の感性や考え方までもデジタル（離散的）になってもらっては困ります。

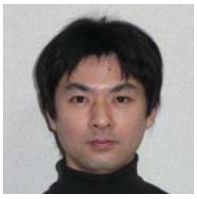
建築という営みも勿論ゼロか一かではなく、その間に無限個の視点や解が存在することを感じ取るアンテナを必要とするはずです。音楽を毎日聴いている若者が、一〇〇Ｈｚ以下の低音を認識できないという場面に出くわすことが仕事がら結構あります。普段の小さなヘッドフォンでは当然聴こえない周波数帯域ですから、生まれて一度も経験したことがない音程に対するアンテナを持っていなくても不思議ではありません。結果、そこに存在する感動を知りえないことになります。建築環境に携わる立場から、実社会における様々な場面を共に経験し、体内に埋もれてしまっているであろう彼らのアンテナを一本でも掘り起こすきっかけを与えてやることが、アナログ人間の責任として大切なことではないかと考えております。

本学における私の仕事始めは、昔その設計に携わらせていただいた東京国際フォーラムでの入学式と卒業式でありました。不思議なご縁を勝手に感じております。芝浦の建築が目指すものを私なりに感じつつそして解釈しつつ、若い人たちと共に前へ進んで行ければと覚悟を決めております。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

最後に、皆様方の益々のご発展をお祈りするとともに、このような機会を与えていただきましたことに深く感謝申し上げます。【芝浦工業大学工学部建築学科　建築環境・音響研究室】

着任にあたって

小澤雄樹



二〇一一年四月に構造担当教員として着任致しました。社会人となってから一一年間、これまで構造設計事務所と大学を行ったり来たりしてきました。建築家の先生方は若い時から大学と設計事務所を行き来、あるいは両立することは珍しくもないでしょうが、構造設計者としては比較的稀なことです。敢えて私のような若輩を歴史ある芝浦工大建築学科の教員として迎えて頂いたことに、感謝すると同時に大きな使命感とプレッシャーを感じています。構造設計者と構造担当教員、どちらも建築構造を生業とする責任ある重要な仕事ですが、その就労環境やプレッシャーは全く異質のものです。最初に関西の私立大学に着任した時はあまりの環境の違いに面食らいましたが、今回は二度目なので大分落ち着いて入ることが出来ています。

短いながらもこの両面での経験を生かし、私に出来ること、期待されていることは、実社会でのエンジニアの「息遣い」を学生に伝えることに他なりません。具体的な憧憬対象としての建築家像を持ち、社会経験の機会も豊富なデザイン系の学生と異なり、エンジニアリング分野に進んできた学生の多くにとって、大学教育と実社会がどのようにリンクしているかを理解することは困難で、ましてや具体的なエンジニアの仕事や役割については殆どイメージ出来ていないのが実情です。構造設計とは、広範な知識・理論を駆使し、自身の全人格を投入して行う極めて社会的な行為であります。これを通じて両者の結びつきを意識させ、目標とする具体的なエンジニア像を築かせることが重要だと感じています。

二一世紀に入ってから僅か一〇年余りの間にも、ＷＴＣ崩壊、耐震強度偽装事件、そして東日本大震災と、建築構造の根幹を揺るがすような事件が頻発しています。そのような激動の世紀をエンジニアとして生き延びるためには、芝浦工大の持ち味である生真面目さ、本質を常に追い求めるひたむきさも勿論重要ですが、同時に広い視野をもって自分の立ち位置を確認し、場合によっては大きな方向転換をも覚悟する柔軟さ、したたかさが求められていると感じています。

日本は世界的に見ても稀なほどの災害大国であり、いくら他の国が技術的に追い付いたとしても、常に自然災害と隣り合って生きてきた日本人の危機意識を真似できるわけもなく、逆に言えばこの意識の下で育まれた世界屈指の建築構造技術はどの国に持って行っても直ちに貢献できるほどの地力を備えています。例え各学年で数人でも、国際的に生き生きと活躍する構造エンジニアを育てることが出来ればこれに勝る喜びはありませんし、それを目標として私自身も努力していき

たいと考えています。

【芝浦工業大学工学部建築学科　建築構造設計研究室】

建築振動・防災研究室　林研究室レポート

山口洋平（大学院　建設工学専攻二年）

建築振動・防災研究室は、大学院生が二名（M一：一名、M二：一名）と学部生が六名、合計八名が在籍しています。当研究室では主に、建築物が地震の際にどのように応答するかを独自の手法を用いて研究しています。林研究室では、週に一度必ず全員が集合し、それぞれの進捗状況を報告します。前期のうちは主に、研究のために必要な基礎知識を勉強し、土台を固めます。後期に入ると、それぞれの研究テーマをはっきりと決め、前期で培った知識を基にそれぞれが研究を行います。

テーマは、常時微動測定を用いた研究を主として行っていますが、ほかにも地震観測結果を用いた研究や、膜構造、トラス構造の研究など広い範囲で研究を行っています。テーマを決める際には、各々がただやりたいことをやるのではなく、それが現在の社会にどのように貢献できるのか、また、既存の研究と何が違うのかを考え、テーマを決定しています。

研究では、大きく分けて「実測結果からの解析」と「モデルを用いた解析」を行います。実測結果からの解析は、実際にそこで起こっている現象をありのままに表わす真の情報として扱います。解析を行い、結果が出た時点でおしまい、ではなく、なぜそのような結果が出たのか、その結果が意味するものは何なのかを考えることを重要視しています。

解析を行っている、と表現すると、ずっと室内にこもりパソコンをいじってばかりいるイメージがあるかもしれません。実際、データを解析する作業はパソコンを用いて行います。しかし、そのデータを得るために、建物を訪れて測定を行い、解析されたデータから自分の目で情報を読み取るなど、ただ流れ作業として研究をこなすのではなく、よく考え行動することを重視して活動を行っています。

私たちは以上のような活動を通じて、研究結果を出すのみでなく、実社会に出た時に適応できる能力を身につけていきます。そして、社会に貢献できる人間として巣立つために日々努力を重ね協力し合い活動を行っています。今後とも、林研究室をよろしくお願い致します。

ゼミの風景

建築・住環境計画研究室　郷田研究室レポート

菊池優希（大学院　建設工学専攻二年）

郷田研究室には、大学院生が一〇名、学部生が一〇名の計二〇名が在籍しており、郷田修身准教授の指導の下、日々、課題や学生設計競技、そして研究などに打ち込んでいます。はじめに各学年の活動と内容を紹介していきます

□四年生の活動

四年生の主な活動は卒業研究です。学部四年間の集大成となる卒業設計または卒業論文に向けたゼミでは、修士一年生も参加し、前期には、自分のテーマを明確にする為の骨格づくりをします。研究の目的・背景・手法について、ゼミを通して議論し、各々の理論の骨組みをつくり、後期の初めにはそれを元に小論文の作成や即日設計を行います．実際に描くことによって自分の持っているイメージを明確にしていきます。これらの材料を元にゼミを重ねながらブラッシュアップをしていき、設計作品、卒業論文を完成させます。

□修士一年生の活動

修士一年生では、全員で行う住宅地研究が主な活動となります。去年のテーマは「住宅地計画における余白の空間利用」でした。近年、ミニ戸建て開発と呼ばれる住宅群が登場してきており、コピー＆ペーストのような住宅が並ぶ状況は、街並みを損ねていると捉えました。そこで私達は、ミニ戸建て開発における特徴を明確にし、キーワードとして、「敷地割・建築の配置」を取り上げ、開発の初期段階である敷地割から住宅地の景観のコントロールをしていきました。この研究では、開発許可制度や道路斜線制限といった現実の法規についても考慮し、分からないことは実際に区役所などへ行き確認するなど、充実した研究になりました。

□修士二年生の活動

修士二年生は修士論文及び修士設計の制作を中心に一年間、活動を行っていきます。ゼミでは、自分の建築的興味について話合いながら自分の論文の主題を決めていきます。それと並行して自分が興味を持った論文を取り上げ、既往研究を調べます。数多くの論文を調べ、読んでいくことにより、様々な手法や論文の構成を学び、既往研究から得た知識も織り込みながら自分だけの論文及び設計をしていきます。

郷田研究室全体の活動としては、春と秋に行われる合宿があります。春合宿では毎年、郷田先生が手掛けた住宅に一泊

二日で訪れ、ゼミを行います。実際の建物を訪れ、図面や雑誌では分からないディテール部分や建具についての説明、施工において苦労した部分の説明をして頂きながら建築の理解を深めていきます。ゼミでは学年混合のグループに分かれ、院生は四年生に卒業設計についての反省点や注意点を伝え、四年生は自分のテーマについて相談します。

秋にも二泊三日程度で合宿を行います。去年は広島へ行き、厳島神社などの伝統的な建築に触れてきました。後日、見学した建築についてのレポートを作成するので、単に眺めているわけにはいきません。一つ一つの建築の特徴を見つけて、メモを取り、スケッチを描くことによって建築の見る目を養います。

郷田研究室の学生は、勉学に励みながらも日々楽しく活動を行っています。単に計画や設計を行うだけではなく、建築の詳細部分にも気を使いながら学んでいけるのが私たちの研究室の特徴の一つではないかと思っています。今度とも郷田研究室をよろしくお願い致します。

春合宿の様子

集合写真

余生はハーモニカ三昧で

町田康（一九五八卒）

六月某日、建築会の幹事の井家氏から突然の電話で、建築会の会報に一筆寄稿して頂けないかという申し入れがあった。些か戸惑いながら何故小生に？と尋ねると、小生と同期の朋友I兄とM兄の推薦であるとのこと。全く余計なことをしてくれたもんだと思いつつも、御両人からの折角の推薦とあらば無下に断るわけにはいかないし、片や日頃疎遠にしている建築会に多少のお役にたつものなら、近況報告ででもご協力しようかと思い、お引き受けすることにした。

先ずは、近況をお知らせする前に、小生と何の面識もない多くの会員諸兄氏のために小生の正体のほんの一端を披歴しておきたい。

一九五八年（昭和三三年）に芝浦工業大学工学部建築学科を卒業し、建築行政に携わることを志し、東京都庁に奉職。江東区役所建築課勤務を振出しに、東京オリンピック施設建設事務所建築課に配属となって、官庁営繕の仕事を勉強させてもらい、一九六四年九月から、憧れの東京都首都整備局（現、東京都都市整備局）建築指導部に配属となり、爾来、一九八九年（平成元年）都庁から都の第三セクターへ移るまでの二五年間を、都市計画・建築行政一途に勤めて、その後、三セクに十年間在籍して、二〇〇〇年三月にリタイアした。

リタイア後は、たっぷり自分の時間が出来たので、小さい頃から馴染んできたハーモニカを、本格的に楽しもうと、ハーモニカサークルを立上げ、大勢の仲間と愉快に練習に励んでいるうちに、更に高じて、コンテストに挑戦しようという熱に絆されて、二〇〇六年にアジア・太平洋ハーモニカコンテスト（台湾大会）に出場して、思い掛けない準優勝を獲得した。これに気を良くし練習に一層の熱が入って、次の杭州大会（中国・二〇〇八年）では念願の優勝（特別賞）を果し、おまけに全日本ハーモニカ連盟から日本ハーモニカ賞・奨励賞を受賞してしまった。

こうなると、もう毎日がハーモニカ三昧で、定期演奏会、コンサート、ボランティアでの訪問演奏等々、たっぷりあった筈の自分の時間に余裕が無くなり、現役時代に戻ったかの如く家庭の事を顧みなくなった小生に、家内も呆れかえっておる今日この頃である。

ハーモニカは小さい楽器だが、腹式呼吸で吹いたり吸ったりしながら音を出すので、健康には頗る良いものである。芝浦工大在学中は音楽部メンネルコールの一員として青春を謳歌し、現在も一年おきに市民合唱団員としてベートーベンの「第九」を歌っているが、やはり、少なくなった余生は、元気な間はハーモニカ三昧を続けて行こうと思っている次第。

桂離宮・修学院離宮を見学旅行で

南野脩（一九六三卒）

私達の同級生は今年七十歳から七二歳になる。建築学科第六回生で昭和三八年（一九六三年）三月に、今から四八年前に卒業した。東京オリンピックが開催されたのが卒業した翌年の昭和三九年一〇月、新幹線が開業したのもこの時である。

昭和三四年（一九五九年）四月の入学式には、この年から建築学科を二クラスにしており二〇〇名近い仲間がいた。このことは入学募集要項に書いてなかったのでびっくりした。当時の話を少ししておきたいと思います。一言でいえば、何も無い大学であったが若い先生方と全国から集まったスケールの大きい仲間に恵まれ、更に景気のいい良き時代であった。

当時、建築学科を有する大学は少なく、特に大学自体が数少なく、芝浦工大卒業の建築家・建築技術者は、日本経済の高度成長に貢献してきたと思います。

在学中で一番記憶に残るのは、建築物の見学と見学旅行です。学内には教育施設らしいものが無く建築の教育は、専ら実際の建築物を見ることが最高の教材であった。地方の大学に無い首都圏の大学であることの最大のメリットです。一年次は鎌倉に日帰り、二年次は日光に二泊の見学旅行、三年次は関西に一週間出かけた。建築を学ぶものは、京都の「桂離宮」「修学院離宮」「京都御所」更に「正倉院」、「伊勢神宮」等を必ず見学するものだとされていた。当時、これらの建築物を見学できるのは、建築系、美術系、歴史系　等々の学生に制限されていた。それはある面一種のステータスであった。

夏の暑い最中に市内電車と徒歩で寺院を見て回った。どの位の距離を歩いただろうか？　最後は、どこの寺院も同じように見えてくるくらい疲れた。

日中の見学でくたびれていながらも、毎晩飲みに行き、当時最大の娯楽であった夜のショウを見に出かけ英気を養った。見学の最後は、大阪の「関電ビル」と「電通ビル」の見学であるが、途中京都山崎の「サントリ山崎工場」を見学。ここで見学後昼食を取らせてもらったが、試飲用にサントリウイスキーのホワイト（七二〇ＭＬ）を三人に一本の割合で出してくれた。タダだからみんな飲んでしまった。大阪に着いてビルの見学時にバスから降りて来ないので困った。

【元芝浦工業大学工学部建築工学科教授、大学院建設専攻指導教授、工学博士、現在　㈱南野建築環境研究所所長・アスベストの調査分析を業務】

回り道

村田省吾（一九六八卒）

久しぶりに新装になった田町の校舎を訪れました。学生時代に芝浦倉庫と呼んでいた建物は瀟洒なものに変わり界隈も昔の面影は全くなく校舎の近くを流れる川だけが変わらない風景でした。考えて見れば卒業以来四二年の月日が経っています。風景が変わることは当たり前でした。

卒業後設計事務所に就職し約一〇年東京と札幌で勤務した後、突然自分の事務所が持ちたくなって茨城県の最北端の郷里にUターンしました。悪戦苦闘の末一五年経って何とか事務所の体裁も整った頃、周囲の勧めを断れず郷里の市長に立候補し一二年、行政の仕事につきました。この間設計事務所の実務は番頭さんに任せ、この間は日曜祭日もないほど他人が作ったスケジュールで動かされる日々で創造的な生活とは無縁でした。

四年前にそんな生活に終止符を打って設計の仕事に戻り久しぶりに絵を描き現場に進んだところで東日本大震災に遭いました。工期の延長をもらい無事に納めましたが震災で我が家も事務所も津波に襲われ床上浸水、半壊の状態になりました。自宅は海岸から約二〇〇Ｍの所にあります。東北の津波ほど強烈なものではありませんでしたが、自宅屋上に避難し水煙とともに倒壊した家屋や家財、車とともに黒い水がブスブスという音とともに押し寄せる様に言葉が出ませんでした。回りは瓦礫の山になりました。自宅周辺の片付けが終わったのは七月の半ばでした。

加えて福島原発の事故、約七〇キロの位置にある我家の回りでも皆がいつでも家を捨てて逃げ出せる準備をして生活しています。

この震災で感じたことは、人間がコントロールできない技術は使うべきでないと言うこと。今は気分を入れ替えて全てをリセットすることにしています。思えば設計一筋ではなく回り道や寄り道の多い今日までした。

新耐震建物は安全か

吉田優一（一九七三卒）

三月一一日、その時私は都営大江戸線新宿駅からＪＲ南口方面に向かって地下街を歩いていました。南口の方向から人々が悲鳴を上げながら西口ロータリーへ向かってきました。一瞬何が起こったのかわかりませんでしたが、大きな揺れを感じ私もロータリーに向かいました。この場所は吹き抜けになっており地上が見えます。見上げると高層ビルは大きく左右に揺れており、カーテンウオールのガラスが今にも落下するのではないかと恐怖を始めて感じました。中に居る人々はどのような状況なのか…。

私の現在の勤務先は証券化されたビルをオーナー代行で運営・管理を生業とする、プロパテーマネージメント（ＰＭ）会社です。

その後の数週間は受託している建物の地震被害の調査に追われました。幸い都内の物件は大きな被害はありませんでしたが、新耐震（一九八一年六月）以前に竣工した三〇〇〇坪以下または一〇階建て以下のビルは、より被害を被ったと言えます。地域的には報道にもあるように地盤の液状化で問題となった浦安とか葛西方面の物件に被害が集中しています。

受託ビルでも葛西方面にある純鉄骨ラーメン構造の九階建、一九九二年竣工物件では、外装の被害はほとんどありませんでしたが、柔構造で設計されていたため、建物が大きく揺れテナントの室内の間仕切り壁やサーバーラックが転倒した被害がでました。室内は天井の一部は落下した状態でした。内部階段は仕上げ材の石膏ボードが落下し避難階段を塞いでいる場所もありました。貸主側は重要事項で建物の耐震状況については説明しており、地震対策については十分喚起しているとの立場ですが、テナントとして耐震対策は当然実施しているが、想定を超えた揺れであったとの事です。テナントからの強い要望もあり、仕口部分の超音波診断やハイテンションボルトの確認も行い異常は見受けられませんでした。

最近の建築物はこの柔構造に対して制震ダンパーを設置するなど、見直しがされているのも前記した様な理由からだと思います。

建物の「安全性」の確保とそのために要する「コスト」のバランスをいかに取るかは重要な問題です。地震で被害を受けた時修復コストと予防コストを比較すれば、一般的に後者の方がかなり安くて済みます。しかし、一〇〇年に一度の地震に備えるためのコストを掛けることに積極的になれないオーナーは多いと言えます。まして証券化された物件は償還期間が三年から五年程度です。大地震がいずれ来るだろうと分かっていても、自らの保有期間に大きな投資を掛ける余裕がないファンドも多いのが現実です。

先に挙げた建物もテナント退去との局面を受け、やっと対策に向けて投資家も動きだそうとしています。もし、これが首都圏直下型地震であったらどうなったのか、実感としてビルオーナーやテナントにとっても大きな課題を付き付けられました。日本のビルやマンションにはかなり老朽化が進んだものも多くあります。東京都は緊急輸送道路建築物の耐震化を推進する条例を策定し、耐震化に要する費用の助成を行うとの事です。少子高齢化が進む中で需要増が見込めないとすれば、補助金を付けるなどして幹線道路に面した老朽化建物は耐震性の高い建物への建替えを促進することは、都市の防災化に必要な施策の一つではないでしょうか。最後になりましたが、このたびの東日本大震災でなくなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

酒場という空間

香月直哉（一九七八卒）

卒業してから、もう三三年になる。都市計画を中心とした仕事は二〇～三五歳までに大体卒業し、その後この新宿歌舞伎町のバー（フランセ）にて生活の糧を得てきましたが、気が付いたらすでに二四年が経っていました。そのバーには大学時代の仲間や社会人になってからの友人知人が集まるようになっていました。皆が三〇代の頃は建築業界もまだ元気も良かったのですが、その後不況も深刻になり、建築現場をはなれる者、地方都市へ転勤する者、都内事務所をたたんで実家へ帰る者、地方では建築そのものからはなれる者や、最近では親の介護の為に地方へ帰って行く者たちなど様々な変化を見てきました。

酒場のあり様も少しずつ変わってきました。酒場には年代や仕事、考え方の違う様々な人たちが集まってきます。ある夜の限られた時間を同じ空間で好きなお酒を飲みながらとも に過ごすのです。それぞれの時間と空間が交錯する場所なのです。特にこのバーにはカラオケを置いていないので昔ながらの雰囲気がまだ残っています。これまではバーに一歩入ると外の世界とは遮断された空間でしたが、今は携帯の普及により常に外とつながっている状態です。以前はカウンターの上にはタバコがおかれていましたが今や携帯が並んでいます。また、若い人たちの酒離れもあり会社などの上の人と飲む姿も見られなくなりました。会社以外で面と向かって話をするのがどちらも面倒になってきたのでしょう。健康志向も強くなったせいか、昔は酒に付き物だったタバコも姿を消しつつあります。体に悪いものは排除され、そのようなものを提供する酒場もなにか無駄なもののように思われつつあるような気がします。しかし、建物などの一見無駄なようにしか思われない空間が実はとても大切な役割を果たしていることがあります。酒場はたぶんそんな場所ではないでしょうか。

酒や酒場はある意味人と人との潤滑油的な働きをしてきた部分もあると思いますが、今やそのような時代は終わりつつあるようです。コミュニケーションの手段はメールやツィッターに変わり、趣味的な話はチャットなどでと、生活のすべてがコンピューター世界の中で行われつつあります。私のいるバーはそれとは対極のアナログ世界ですが、時代の急激な変化はこんなところにも表れているようです。

近況報告

小林宜文（一九八八卒）

東日本大震災で被災された方々に心からお見舞い申し上げ

ます。

3．11このような大災害に遭遇すると、建築の仕事に携わっている責任の重さを再認識されている方も多いのではないでしょうか。

思い返せば、建築学科に入学して最初の授業であった建築計画概論で、「建築はシェルターである」と石川先生から命題を与えられて建築の道を踏み出したわけですが、誠に多くを示唆した礎の言葉であると、また、「美しくない建築はダイナマイトで…」くらいの気概も注入されて、建築に関わっていくモラルとクオリティーを課せられた第一歩であったと思うのです。ポップな環境のデザインから仕事を始めた私にとって、この視座が少なからずあって、浮かれることなく空間の健全さと信頼を得てきたと思っています。震災以降、多事 多彩な交流空間の設計を業としている者として、人、社会、歴史と建築の関わりについて見つめ直し、責務を考えています。こんな思いに駆られる私の近況報告をごく簡単に。

八八年（株）丹青社というディスプレイ会社に入社して、浦安にあるアトラクションから店舗、温泉施設、旅客施設、集合住宅と求められるままに建築設計に取り組み、一六年前から情報、コンサルタント部門である（株）丹青研究所で博物館や寺社の文化財保存公開施設の設計に従事しています。担当作としては、永平寺宝物殿、昭和天皇記念館、静岡市美術館などがあります。特に博物館保存部門の設計に関しては、大手設計事務所や建築家のサポートも行っています。特殊業務として国指定文化財（工芸品）の保存環境整備に従事して、関西を中心に東大寺など多くの文化財を所有する社寺で文化財保護に携わっています。文化庁の業務で、近年の環境変動に対応したこれからの保存環境指針の策定にも取り組んでいます。

こんな少し変わった設計に携わっていると、今様の力業ではなく自然環境と巧みに接していた先人の世界観に親しみを覚え、同時に記憶や伝統が失われた諸行の怖さを覚えることもあります。決して後退するのではなく未来に向けて、今、良き工学を問い直したいと思うのです。

【（株）丹青研究所　取締役兼文化空間文化財環境研究部長】

私の業務経歴書

野島毅（一九九三卒）

一九九三（平成五）年に中庸の成績で卒業。同年四月に積水ハウス株式会社に入社し、新宿の東京中層住宅営業所に配属。重量鉄骨プレハブを扱う積水ハウスの中では亜流の部署で、今はもうない。設計と工事管理の現場で住宅業界の厳しさを学びつつ、ウィンドサーフィンと同期女子との飲み会に明け暮れる毎日ながら、一身上の都合により三年で退職。

一九九七（平成九）年にログハウスメーカー（株式会社アールシーコア）に転職。ベンチャー企業であったが、経営のノウハウを叩き込まれたり開発した商品がGマークを取ったり雑誌の取材を受けたりと、インハウスデザイナーとして楽しい時間を過ごす。やっぱり小さい会社は「いいね！」カナダ、フィンランド、中国と海外にも進出し、グローバルな気分を味わう。仲間にも恵まれ、忙しくも自分が成長していると実感できた時期だな。

二〇〇五（平成一七）年に二人目の子どもを授かる。娘たちが小さい間の時間を大切にしたかった（どうせ大きくなったら煙たがられる！）、再度転職を決意。

二〇〇六（平成一八）四月、東京都に民間経験者枠で入庁。小さな会社もいいが、やはり寄らばナントカの陰か…一〇年間勤めたログハウスメーカーを退職する際には社内に激震が走り、退職後は社員懐柔のため、労務関係の仕組みがいつくか改正されたと風の噂。会社が嫌で辞めたのではなかったのだが…。

都庁で最初に配属されたのは住宅政策を所管する部署。条例改正やらマスタープラン策定やら審議会やら庁内調整やらで、二年間ほぼ毎日タクシー帰りと生活が激変。役所がラクだなんて言ったやつは誰だ！と心の中で叫んでみても後の祭り。外から見ただけでは分からないこともあるのだな。ここで三年間、法令・例規の読み方や役所の行動原理、それと地方自治体による住宅行政の困難さを学ぶ。

四年目に土地利用計画を所管する部署に異動。役所はやはり異動が早い。用途地域の指定・変更を行う部署で、都市計画の策定のため区市町村との調整や、都市計画法に基づき実施する基礎調査を担当。先の大地震はこの部署が入る新宿本庁舎で遭遇。丹下健三設計のやつだ。西新宿の高層ビル群がこんにゃくのように揺れるのを間近で見たのは、ある意味得がたい経験であった。この部署は二年間で終了。

都庁六年目になるこの四月には、立川にある都営住宅の建替を所管する部署に異動。都営住宅は古いものから順次建替えを行っており、現在は昭和三〇年代、築五〇年超のものを建替えている。建替えの際には居住者の皆さまに移転（引越）していただくのだが、現在の担当業務は、その移転先のあっせんや移転料の支払いなど居住者の全般的なお世話係。行政らしい仕事だな。都営住宅の居住者は高齢の方が多く様々な問題を抱えているため、業務の半分以上は居住者のカウンセリングといっても過言ではない。次の世代に良好な公営住宅を残していくための重要な事業であるが、ナカナカ骨が折れる…。

卒業以来体重が一五kg増えてしまったことに危機感を覚え、五年前から合気道を始める。昨年冬に初段を取得。また、マラソンブームに乗って半年前にトレイルランニングを始めた。ロードではなく山道（トレイル）を走るのは最高に気持ちがいい。レース後のビールもこれまた美味いので、運動量見合いで体重が減らないのが目下の悩みでもある。

【東京都 都市整備局 西部住宅建設事務所】

僕が一〇年過ごした街にオリンピックがやってくる

山嵜一也（一九九八卒）

オリンピックまであと一年となった。四年に一度の世界的イベントを一〇年過ごした街、ロンドンで迎える。

二〇〇一年、ロンドンへ観光ビザで入国し、職探しをした。前職で労働許可証を取得し「海外で建築。目指していたのはこれだ！」とウキウキ仕事をしていた矢先に解雇を通告される。途方に暮れていたそんな僕に手を拾ってくれたのが現在勤める事務所の模型場だった。

二〇〇四年頃、オリンピックがロンドンに決まるずいぶん前、僕は会社の地下で畳一帖大の一：二〇〇〇スケールのオリンピック会場の模型を作っていた。同僚と片言の英語で「どうせパリで決まりだよな」とブツブツ言いながら。その模型がパリを打ち破ることになる。

二〇〇〇年代の英国は本当に景気が良かった。日本の高度経済成長、バブルを先輩の〝語り〟でしか知らない僕は周囲の【浮かれた空気】にビクビクしながら生活していた。当時は英語が喋れなくても、生き延びれるぐらい人手が足りなく、世界中から人が集まっていた。

世界の人々と協働していると日本の考え方だけでなく、英国の考え方すら通用しない。正解がない。答えは一つではない。その都度柔軟に対応していく。相手を説得し、自分を納得させる。そのコミュニケーションこそがデザインではないかと思えたのは、設計監理に携わった欧州最大級の地下鉄駅、KingsCross St. Pancras駅が二〇〇九年に竣工した時だった。

来年、ヒースロー空港をはじめ3つの国際空港や欧州大陸からの国際特急列車ユーロスターに繋がるこの巨大なハブ駅を通過してロンドン東部にあるオリンピック会場に世界中から人が集まることになるのだろう。

僕が地下の模型場で作った巨大なオリンピック模型はどこかに行ってしまった。

二〇一二年七月二七日開幕。その時には一：一へとスケールアップしたオリンピック会場を訪ねてみようと思う。

建築学科の近況報告

藤澤彰

（二〇一一年度建築学科主任）

建築学科の近況を報告いたします。

三月一一日以降、年度末、年度初めの学校行事の日程は混乱しました。

二〇一〇年度の学位記授与式、卒業記念パーティは三月一七日に予定されていましたが、紆余曲折のすえ、学位記は期日をさだめて豊洲校舎において授与し、新年度となった四月二日に東京フォーラムで卒業式を行いました。震災直後で、いたしかたないとはいえ、参加できない卒業生が大変多く残念でした。一一四名が卒業しました。

各賞の受賞者と卒業設計・卒業論文のタイトルは以下の通りです。

□学業成績最優秀賞・総代・建築会賞

田邉泰人

□学業成績優秀賞・有元賞

那須野馨

□学業成績優秀賞

浅野賢一／西里賢／久保綾香／島村俊輔／植田隆也

□卒業設計最優秀賞・三浦賞

佐野亮　「深層のアゴラ―ノーテーション、アルゴリズム、プランニングから生まれる滞留の場―」

□卒業設計優秀賞

武井良祐　「偏在する中心―池袋における住居空間と役所空間の再編集―」

植田隆也　「一五TB―大量化する古書の上の話―」

鈴木寛己　「Maximize commerce―速度を基準とした郊外型ロードサイド店舗の再構築―」

寺田彩瑛子「祖母の家」

□卒業論文優秀賞

金暎美　「韓国における建築基準法の制定とその後の建築政策に関する研究」

田中潤　「路地をもつ密集市街地の性能に関する研究―東京都中央区月島地区を事例として―」

田邉泰人　「富士吉田市小室浅間神社の社殿造営と遷宮祭に関する研究―郡内大工萱沼弥左衛門造営史料による考察―」

平野彩奈　「神奈川県の飲食店における空気環境の実態調査」

□卒業論文優秀賞・浜田賞

久保綾香　「鉄筋コンクリート造内部梁・柱接合部におけるせん断入力量と補強筋量の関係」

□卒業論文優秀賞・浜田賞

花嶋貴之　「鉄筋コンクリート造耐震壁の実験の変遷及び内部応力に関する研究」

□卒業論文優秀賞・浜田賞

松岡知亮　「実測値の位相情報を用いた建物の立体振動モード推定手法の研究―位相差平均による運動方向からの高次モードの把握―」

二〇一一年度の入学式は四月二日に東京フォーラムで行われました。一一三名の新入生を迎えました。震災直後とあって、例年に比べると、建築学を学ぶ覚悟と張りつめた緊張感が感じられました。

また、四月より古屋浩教授、小澤雄樹准教授、お二人の新しい先生をお迎えしました。古屋先生は建築環境・音響工学が専門で、かつて東京フォーラムの音響設計を担当したと伺っております。また、小澤先生は構造設計が専門で、大学院を出たばかりの駆け出しのころ、千葉市の打瀬小学校の構造設計にかかわったと伺っております。両先生とも、研究面ばかりでなく実務経験も大変豊富な経験をお持ちです。これまでの建築学科の先生とは一味違ったスマートな個性を持っておられ、今後の活躍を大いに期待しております。

デザインチャンピオンシップ二〇一〇

第九回を迎えたデザインチャンピオンシップが、二〇一〇年の芝浦祭期間中の一一月六日に開催されました。デザインチャンピオンシップは二〇〇二年より始まった建築学科主催の建築設計コンペです。毎年、外部講師をお招きして、九月に出題とご講演を、一一月の学祭期間中に合わせて公開審査と作品展示を行います。過去には隈研吾氏、内藤廣氏、山本理顕氏他の著名建築家が出題を行い、また学科、学年を問わず応募できるので、建築学科の一大イベントとして定着しています。

昨年は千葉大学大学院教授の栗生明先生に出題いただきました。栗生先生は、栗生総合計画事務所を主宰されている建築家であり、植村直己冒険館では日本建築学会賞も受賞されていて、平等院宝物館鳳翔館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館などの設計も手がけられています。

「ＥＡＲＴＨＴＥＣＴＵＲＥ　天と地の間に」という出題に対し、建築学科をはじめ、建築工学科、環境システム学科、大学院から総勢五五チーム一一〇名の応募がありました。パネル展示の一次審査、公開プレゼンテーションの二次審査を行い、大学院一年生チームの作品「豊洲田園風景」（長田極・松本善実）が最優秀賞に選ばれました。その他に優秀賞二点、佳作五点が選ばれました。

本年も第一〇回のチャンピオンシップが、難波和彦氏（東京大学名誉教授・界工作舎代表）の出題で行われます。学祭期間の一一月四日（金）に豊洲校舎製図室で公開審査を行いますので、是非、足をお運び下さい。

募集ポスター

最優秀賞「豊洲田園風景」

優秀賞「no line no holizon」

□デザインチャンピオンシップの歴史

第一回（二〇〇二年）審査員：隈研吾氏
　出題：ｕｎｉｔ ｏｂｊｅｃｔ
第二回（二〇〇三年）審査員：元倉真琴氏
　出題：都市の隙間？あなたが都市を変える
第三回（二〇〇四年）審査員：内藤廣氏
　出題：動く構造体
第四回（二〇〇五年）審査員：山本理顕氏
　出題：都市ミュージアム
第五回（二〇〇六年）審査員：小島一浩氏
　出題：新校舎に“ＦＬＡ”をインプットせよ
第六回（二〇〇七年）審査員：古谷誠章氏
　出題：ハイパースクール／学校を超えた学校
第七回（二〇〇八年）審査員：北山恒氏
　出題：未来の集合体
第八回（二〇〇九年）審査員：山下保博氏
　出題：新しい環境の創出

優秀賞「隣り合いの家」

卒業生による就職セミナー

二〇〇四年より続いている卒業生による「就職セミナー」が、昨年も一〇月二七日、一一月一〇日の二日間にわたり開催されました。より厳しさを増す就職活動を間近に控えた現役学生にむけて、先輩達から自分は何を考え、どういう選択をしたかを率直に語って頂き、進路決定に役立てるというの

が、この会の趣旨です。昨年は六名の先輩方のお話に延べ百名を越える学生が、神妙な面持ちで聞き入っていました。講演終了後は学生が個人的に先輩方に話を訊く姿が散見されるなど、卒業生と現役学生の交流の場にもなりました。講演者とお話しの概略をまとめました。

■構造設計分野から

株式会社安井建築設計事務所

足立幸多朗・二〇〇七卒（岸田研究室）

基本設計、実施設計、確認申請、耐震診断を例にあげながら、構造設計の業務について説明頂くとともに、組織設計事務所の利点を自身の経験をもとにお話し頂きました。学生時代を振り返って、やっておけばよかったと思うことなど、現役学生には貴重なアドバイスも頂きました。

■意匠設計分野から

鹿島建設株式会社

原嶋宏樹・二〇〇六卒（堀越研究室）

合同卒業設計展など課外活動にも積極的に取り組んでいた学生時代のこと、入社四年目の原嶋さんですが、年を追うごとに仕事の内容が変わり責任の質も変わってきたことなどを、これまで関わってきた商業ビルやオフィスビルの仕事のスライドを交えながらお話し頂きました。

■施工管理分野から

大成建設株式会社

高橋文啓・一九九六卒（藤村研究室）

施工管理に求められるコスト管理、安全管理、品質管理について、詳しくお話し頂きました。また、朝礼に始まり、職長との打合せ、仮設の段取りなどを行う現場監督の一日についてのお話は、未だ見ぬ建設現場のイメージを十二分に学生たちに伝える興味深いお話しでした。

■施工管理分野から

安藤建設株式会社

川浪健太・二〇〇五卒（枝広研究室）

ものづくりと身近に関わりたくて現場監督の道を選んだという川浪さんからは、工場建設工事事例を中心に、工程、品質、安全、原価、環境という五つの重点管理項目についてのお話しを頂きました。現場監督に求められる能力として、曖昧でなく明確な指示ができることという言葉が印象的でした。

■行政分野から

江東区都市整備部

山本塁・二〇〇五卒／二〇〇七大学院修了（村上研究室）

江東区都市整備部まちづくり推進課に勤務されている山本さんは、建築工学科出身で、自然環境、歴史環境を活かしたまちづくりができると考え公務員を選んだとのお話しでした。都市計画課、建築課、建築調整課、営繕課、まちづくり推進課など多岐にわたる行政の建築職の業務内容をご紹介頂きました。

■設備設計分野から

株式会社大林組

根本智之・二〇〇六卒／二〇〇八大学院修了（西村研究室）

二〇〇八年に大学院を修了されたばかりの根本さんですが、スカイツリーの設備設計に携わるなど、即戦力としてご活躍されているようです。また、担当された勝ちどき駅前の高層マンション建設工事を例に、建築設備設計、工事の業務内容について詳しく、分かりやすくお話し頂きました。

足立幸多朗氏

川浪健太氏

原嶋宏樹氏

山本塁氏

高橋文啓氏

根本智之氏

第一〇回　建築会総会・懇親会のお知らせ

左記の要領で建築会総会・懇親会を開催いたしますので、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきたくご案内申しあげます。

記

□日時　平成二三年一一月一九日（土）

■受付　午後二：〇〇～

■学年幹事会　午後二：〇〇～二：四五

■総会　午後三：〇〇～三：三〇

■懇親会　午後四：〇〇～六：〇〇

□会場

芝浦工業大学　豊洲校舎交流棟五階　五〇一教室

東京都江東区豊洲三－七－五

東京メトロ有楽町線「豊洲」駅 徒歩一〇分

■受付　交流棟五階　五階ロビー

■総会　交流棟五階　五〇一教室

■懇親会　交流棟三階　カフェテリア

□会費

五、〇〇〇円（当日受付にてお支払いください）

□連絡先

■学内事務局

芝浦工業大学建築学科

ＴＥＬ：〇三－五八五九－八四〇〇（学科事務室）

■学外事務局

（有）ＫＡＩプランナー

〒一一四－〇〇一四

東京都北区田端一－二〇－二五　染谷ビル

ＦＡＸ：〇三－三八二四－五五七〇

Ｅ－ＭＡＩＬ：sit_arch@yahoo.co.jp

※出席連絡ハガキは一一月一〇日までにお出しください。

尚出席の連絡は建築会ホームページ（http://sit-arch.com）でも受け付けております。

二〇一二年度会費納入のお願い

二〇一一年度決算は左記の通りです。ここ数年、会費納入率は徐々に改善されておりますが、まだまだ低調ですので、是非、皆様のご協力をお願い致します。同封の郵便振替用紙で年会費二、〇〇〇円をご送金ください。会員番号が封筒のタックシールに記載されておりますので、郵便振替用紙の会員番号欄にご記入ください。住所や勤務先などに変更があった方は通信欄にその旨を記載して下さい。名簿のデータを更新します。

なお、名簿への不掲載を希望される方は会費振り込み用紙の通信欄にその旨をご記入下さい。

編集後記

今年で新体制になってから三年が経ち、会報も第三号となりました。月に一度、平日の夜。卒業生が豊洲校舎に集まり、限られた時間の中、多くの議題に付いて話し合い、役割分担を決め、運営していく。異なる世代が共通に抱く、何か母校のために貢献したいという思い。お互いの近況を知り、これからを語らうことの充実感。もちろん、会合後の酒を酌み交わすことが大きな楽しみなのも間違いありません。そんな集まりが三〇数回も続いたと思うと、時間の経つのは早いなと改めて感じます。

来る一一月一九日には総会ならびに学年幹事会が開催されます。三年に一度しか開催されない建築学科卒業生の貴重な集いの場です。事務的な会合もありますが、もちろん後には、楽しみな懇親会も控えています。卒業生の皆さま、ぜひお誘い合わせの上、豊洲校舎にお越し下さい。田町と違い、少し駅からは遠くなりましたが、きっと懐かしい面々が待っているはずです。

さて、本号もお忙しい中、原稿を快諾して下さった卒業生の皆様、先生方、関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

道田淳（一九九三卒）

2011年度　会計報告　（2011.7.31現在）

収入	繰越金	普通貯金	914,018
		普通貯金（会費振込用）	1,722,550
		現金	2,306
		小計	2,638,874
	会費	年会費振込み	986,000
	広告料	会報広告収入	50,000
	雑収入	郵便貯金利子	227
		小計	1,036,227
	計		3,675,101 円

支出	会報第26号印刷費・送料		741,052
	ホームページ維持費		117,180
	事務費	通信費	6,240
		振込手数料	1,260
		事務用品費	305
	計		866,037 円

次期繰越	普通貯金	44,753
	普通貯金（会費振込用）	2,758,550
	現金	5,761
	計	2,809,064 円

支出＋次期繰越金	3,675,101 円

個人情報の取り扱いについて

二〇〇五年四月一日より「個人情報の保護に関する法律」が施行されました。本建築会におきましても会員の個人情報（氏名、自宅住所、郵便番号、電話番号、勤務先名、勤務先電話番号等）につきましては、芝浦工業大学建築会会則第八条により厳重に管理しております。

第八条（個人情報の取り扱い）

（一）建築会の個人情報は以下の目的に使用する。

一. 芝浦工業大学建築会「名簿」の作成資料

二. 建築会会報の送付

三. 建築会関連の案内

四. 芝浦工業大学からの案内、連絡事項など

五. 会員による同期会等の連絡

（二）会員から提供された個人情報は上記利用目的の範囲を超えて利用しない。又収集した個人情報の利用、提供には厳正な管理の元「本人の同意がある場合」又は「法令等で要求された場合」を除き、第三者に開示、提供しない。

（三）名簿作成に当たり氏名以外の個人情報（住所・電話番号・勤務先）削除の要求がある場合はその趣旨申し出により名簿から削除する。

（四）会員個人情報の管理は建築会事務局が一括して行う。

お問い合わせ　学校法人芝浦工業大学建築学科内建築会担当
〒一三五―八五四八
東京都江東区豊洲三―七―五
ＴＥＬ：〇三―五八五九―八四〇〇
ＦＡＸ：〇三―五八五九―八四〇一

建築会ウェブサイト

http://sit－arch.com/